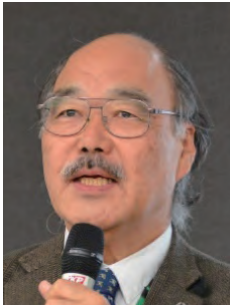


IV. 問題提起



SWOT 分析による国際比較から見えてくる 日本酪農の展望と意義

日本大学 生物資源科学部 教授 小林 信一氏

SWOT 分析による 3 国比較

	オランダ (NL)	カナダ (CAN)	日本 (JP)
S	自然環境 (Nature) 酪農家、家族経営 (Farmers, Family farms) 生産者組織 (Producers organisation) インフラ (Infrastructure) 研究開発 (R&D) 政策 (Policy), GAP	自然環境 (Nature) 酪農家、家族経営 (Farmers, Family farms) 生産者組織 (Producers organisation) インフラ (Infrastructure) 研究開発 (R&D) 政策 (Policy), Supply Management	自然環境 (Nature) 酪農家、家族経営 (Farmers, Family farms) 生産者組織 (Producers organisation) インフラ (Infrastructure) 研究開発 (R&D) 政策 (Policy), 畜産経営安定法
W	農地 (Farm lands) 都市化 (Urbanization) 国際市場 (International market) 環境 (Environment) 国際市場 (International market) 新技術 (New Technology)	農地 (Farm lands) 都市化 (Urbanization) 国際市場 (International market) 環境 (Environment) 新規参入プログラム (New Entrants) 新技術 (New Technology)	農地 (Farm lands) 都市化 (Urbanization) 国際市場 (International market) 環境 (Environment) 政策 (Policy) 乳牛価格 (Cow Price) 農地 (Farm Lands)
O	酪農家 (Dairy farmers)	消費者 (Consumers) 政策 (Policy)	国際市場 (International market) 政策 (Policy) 酪農家 (Dairy Farmers)
T	農地 (Farm Lands) 労働力 (Labour) 環境・動物福祉 (Environment/Animal Welfare) コスト (Cost) 政策 (Policy)	労働力 (Labour) 環境・動物福祉 (Environment/Animal Welfare) コスト・投資 (Cost/Investment) 政策 (Policy) 国際市場 (International Market)	国際市場 (International market) 労働力 (Labour) 生産者組織 (Producers Organisation) 乳牛価格 (Cow Price) 環境 (Environment)

オランダとカナダについてはキースさんとステイーブさんの講演内容を参考に、日本については鶴川さんがまとめられた先進的な事例を基に、日本全体の視点から私の意見も含めて整理しました。

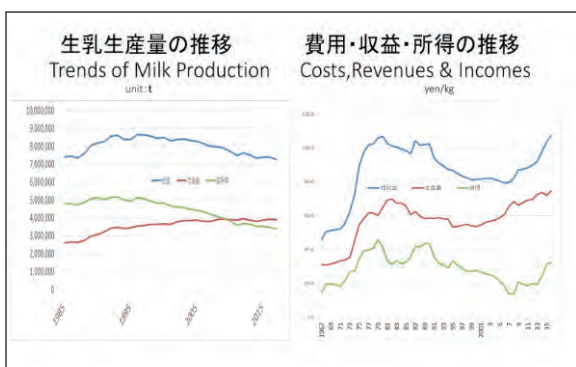
ディスカッションの切り口については、SWOT 分析によって、現在のそれぞれの国の酪農の弱み・強み、そしてチャンス、あるいは脅威といったものを踏まえ、どのように強みを活かし、弱みを克服し、脅威に対応し、そしてチャンスに乗じるか、というようなことを考えていくことが一

つの筋道であり、酪農生産の持続的な発展を考えていくことになるのではないのでしょうか。

たくさんの事柄を挙げていますが、非常に感想的に言いますと、強みと弱みは3国においては、ある意味では非常に似ていると考えました。それぞれの置かれている立地環境は違いますが、自然的な環境、家族経営が主体的になっているなどの点です。弱みについては、農地は価格面や非常に足りていないという問題、都市化による農地問題だけではなく、都市住民の農業・酪農に対する無関心や無知といったようなことなどもいえると思います。チャンスについては、それぞれ異なる状況もあるし、脅威についても、環境、あるいはコスト高進、労働力というようなものが共通する問題としてあります。日本について言うならば、例えばチャンスでもあるし、脅威でもあるという問題も当然あるわけです。例えば、乳牛価格が高騰しているというのは、ある意味ではチャンスなのですけれども、同時に脅威でもあり、乳牛資源の枯渇という問題にもつながります。政策的な問題で言えば、政策が変わり、規制緩和に向かうことは、脅威でもあると同時にチャンスでもあると言えるかもしれません。

その辺をどのように考えるかということも SWOT 分析の中で考えていく必要があるのではないかと思います。

3 国比較の中で、日本がオランダ・カナダと決定的に違うのは、残念ながら生乳生産が落ちているということ



です。この 20 年で 860 万トンを超えてピークにして現在 720 万トンと、100 万トン以上減少しており、その減少に歯止めがかかっていないという状況です。クォータ制度を廃止したオランダ、クォータ制度を持っているカナダは、どちらかという過剰生産を何とかしようという政策的な手段であるのに対し、日本は生産者による生乳生産調整はありましたが、今はむしろ、増やす、増やすと言いつつも、なかなか増えない状況があるという問題があります。

表は、費用・収益と所得の推移を約 50 年にわたってまとめたものです。今は非常に酪農の収益性が良い、一種のバブルと言われる状況ですが、この 50 年のスパンで見ると、乳価がぐっと上がって、次に長期的に下落していましたが、飼料高のときから、乳価が反転して上昇している状況があります。所得は長期的に低減していた状況が、今反転しており、同時にコストもかなり上昇している状況にあるということで、今後どのように変わっていくのかということかと思えます。

議論の方向性

持続可能な酪農生産とは
Sustainable Dairy Farm Management

- 経済的な持続可能性
(**Economic Sustainability**)
- 環境的な持続可能性
(**Environmental Sustainability**)
- 地域経済の発展
(**Community Development**)

本日のテーマは、持続可能な酪農生産というものを考えていくということで、スティーブさんがまとめた酪農生産における三つの観点、経済的な視点、環境的な視点、あるいは地域経済、地域社会と言ってもいいと思いますが、それぞれの持続可能性を柱として考えていく必要があります。木村さんの SDGs の講演とも共通すると思います。

持続可能な酪農生産のための課題
Sustainable Dairy Farm Management

- 国際市場 (**International market**)
- 政策 (**Policy**)
- 酪農家 (**Dairy Farmers**)
- 労働力 (**Labour**)
- 生産者組織 (**Producers Organisation**)
- 乳牛 (**Replacement/Heifers**)
- 環境 (**Environment**)
- 酪農の役割 (**Significance of Dairying**)

先ほどの SWOT 分析を踏まえ、日本の酪農を今後どのように発展させていくか、という観点から脅威となるものを挙げ、これらをどのようにして克服していくか。そしてチャンスをもどのように活かすのかということも一つの柱として考えていき、最終的には酪農の役割、あるいは家族経営というものが必要であるという、その意義についても考えていくことができると思います。